

研究主題 中学生の入学時における学校不適應に関する研究
～学校環境適應感と不安の関連からの分析～

要約：本研究の目的は、小6から中1にかけて学校不適應を示す、いわゆる「中1ギャップ」の問題を、学校環境適應感と不安の関連から、いつ、どのような手だてが必要であるかを検討することにある。研究1ではギャップ対策の現状を把握するために調査を行い、実態をまとめた。研究2では、研究1を受けて研究校を決定し、学校への適應と不安に関して比較、分析を行い、手だてをとることが何らかの効果をもたらすという結果を得た。その要因は特に友人との円滑な人間関係の構築にあるのではないかと推測される。入学当初の早い段階で、特に女子に対して人間関係を重点に手だてをとり、学校生活への適應を促すことが必要であると言えよう。

キーワード：中1ギャップ、学校環境適應感、不安、人間関係、入学当初の手だて

I はじめに

全国的に見て、小学校から中学校へ進学するにあたって、いじめ・不登校などの件数が約3倍にも増えるという報告がなされている。（文部科学省・2008）によると不登校数は全国で小学6年生8,143件、中学1年生では25,129件、いじめの件数は小学6年生で9,903件、中学1年生で21,077件であった。

このような現象から生じる不適應をひとまとめにして「中1ギャップ」という一言で表現したのが、新潟県の教育委員会である。2年間にわたり実地調査を実施し、その要因から示された対応策について実践的に検証した。

実際に、入学したばかりの子どもたちはどのようなことに対して不安を持ち、不適應感を募らせていくのだろうか。大きな要因としては学習と人間関係が考えられる。中学校では、教科担任制がとられ、学習がより専門的になり進度も速くなる傾向がある。小泉（1994）のように教師の指導の在り方の違いにも不安を感じるかも知れない。人間関係においても、中学校では他の小学校の子と共に新しい関係を再構築する必要がある。また、子どもたちは最上級生として過ごした学校生活から、急に新米1年生として扱われる中学校生活を始めるのである。そのような状況の中で

うまく新しい環境に適應していけないと感じる場面があっても不思議ではない。特定の子だけの問題ではなく、だれにでも起こりえる可能性があることを考えれば、入学当初に抱える不安をできるだけ早い時期に解消できるように援助する必要がある。新しい環境に適應して自分のあるべき姿を思い描くことができれば、生き生きと学校生活を送ることができるであろう。

以上のような観点から、中1ギャップ問題を考えることは円滑な学校生活を行っていく上で重要であると考え、適應と不安の関連からこの研究を行うこととした。

II 目的

研究1はK市内において中1ギャップ対策としてとられている手だてを整理すること、研究2は入学当初の手だての有無によって入学前後の適應感や不安感の変化に違いがあるかを検討することを目的とした。

III 方法

研究1では、K市内で中1オリエンテーション合宿とその前後にも手だてを行っている学校の情報を事前に入手した上で、5校を訪問してインタビューを行なった。研

究2では、研究1の結果をふまえて、通常の手だてをとるA校、中1ギャップを意識した手だてをとるB校の2校を研究校として選び、中学校生活における不安・期待の内容を知るためにA校の校区の小学6年生を対象に予自由記述形式の予備調査を行なった。本調査では、通常の手だてのA校(178名)とその校区の2小学校(178名)、意識した手だてのB校(214名)とその校区の3小学校(214名)の児童生徒対象に以下の質問紙調査を行なった。

- (1)予備調査で作成した不安・期待尺度(4月,7月)
- (2)状態不安STAI尺度(4月,7月,9月)
- (3)内藤他(1986)による高校生用学校環境適応感尺度から小・中用に作成した学校環境適応感尺度(2月,7月)

IV 結果と考察

研究1 オリエンテーション合宿実施の主な目的は団体行動を通して集団の規律の大切さを学ぶことと生徒間の交流であった。この合宿の利点は共通の体験活動を通して先生と生徒、生徒同士が仲よくなれること、先生が早期に生徒を把握しやすいこと、学校生活についての一斉指導が行えることがあげられた。問題点としては、4月は多忙な時期であり準備が大変であること、時期の重なりや学校選択制により事前に新入生の人数把握が困難で、施設面で利用が限られることであった。

研究2

(1) 不安・期待

予備調査から得られた結果をKJ法的手法で整理し「部活動」「人間関係」「勉強」「その他」の4領域に分類した。さらに「規律」「学校行事」の面も不安や期待があると判断し、あわせて13項目の「不安・期待尺度」を作成した。この尺度の4月と7月を比較してみると、友人関係において両校の差が見られ、A校が友人関係に不安を抱えていると思われた。同じ人間関係でも「上級生との関係」「いじめ」では両校とも不安は減るといった同様の結果であった。都筑(2001)は中学校生活に対して何の不安も期待も抱かないタイプのこどもは、入学後には悩みを増大させ、軽度の無気力ともいような状態に陥ることを指摘している。今回、4つめの選択肢「何とも思わない」の項目の解釈があいまいであったため、正しい解釈はできなかった。

(2) 状態不安

4月、7月、9月の各月において中学校×性別の二要因分散分析を行った。4月(Figure 1)は性別の主効果が有意

であり、女子が男子よりも不安が高かった。7月(Figure 2)は有意な差はなかった。9月(Figure 3)、中学校、性別に主効果が見られ、A校が有意に高く、女子が男子より高かった。4月から9月にかけての推移(Figure 4)では、状態不安×中学校の二要因分散分析でどちらも有意な主効果があったが、中学校と状態不安に交互作用が有意であり、B校が4月から7月にかけて有意に下がった。

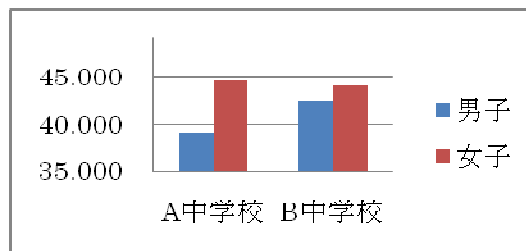


Figure 1: 状態不安4月の平均値

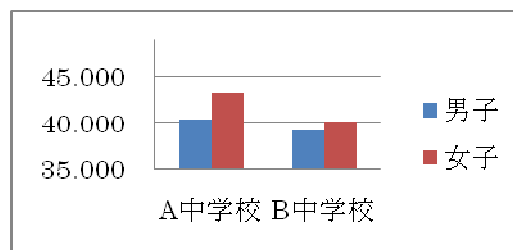


Figure 2: 状態不安7月の平均値

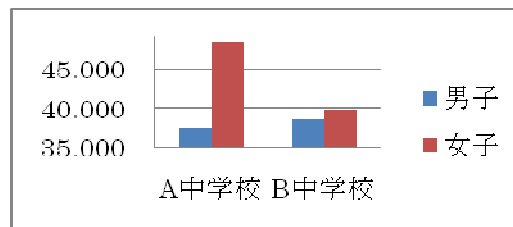


Figure 3: 状態不安9月の平均値

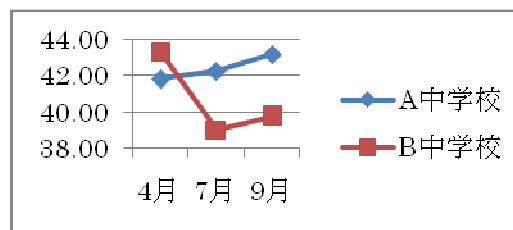


Figure 4: 状態不安4月、7月、9月の推移

(3) 学校環境適応感尺

ア 学校環境適応感尺度の項目の精査

小中とも、最尤法、プロマックス回転で因子分析を行い、「友だち関係」「先生との関係」「規律」「学習」の4因子解を得た。因子数及び項目数の調整を行い、22項目を決定した。

イ 各時期と推移

適応感の得点から2月(Figure 5)と7月(Figure 6)において小・中学校×性別の二要因分散分析を行った。2月には有意な差はなく、7月には中学校に主効果が見られ、B中学校の方が有意に高かった。2月から7月の推移(Figure 7)では学校環境適応感に主効果があり、全体的に7月は有意に下がった。B中学校では2月と7月に有意な差はないが、A中学校では7月が有意に下がった。小学校では適応に差がなかったのに、進学した中学校では差が現れた結果となった。

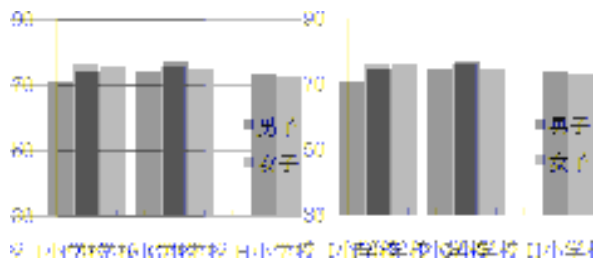


Figure 5: 学校環境適応感 2月の平均値

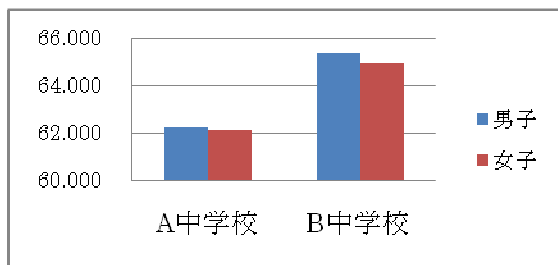


Figure 6: 学校環境適応感 7月の平均値

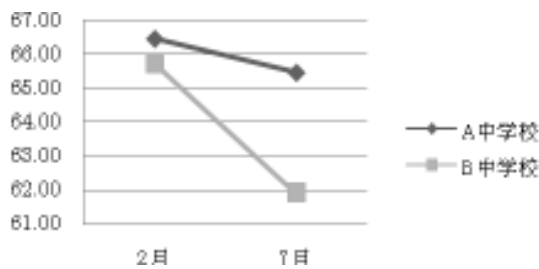


Figure 7: 適応感 2月から7月の推移

ウ 因子別

4つの因子で2月は有意な差はなかったが、7月で「友人関係」(Figure 8)「先生との関係」(Figure 9)に中学校の主効果があり、B校の適応が高かった。「規律」では有意な差はなく、「学習」(Figure 10)では性差が見られ、男子の適応が高かった。

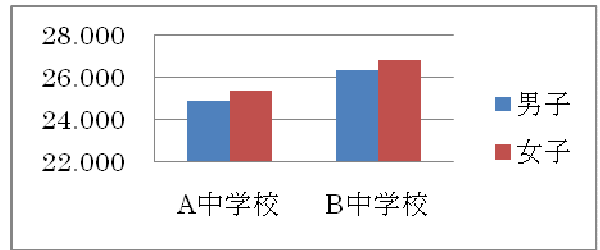


Figure 8: 因子別「友人関係」(7月)

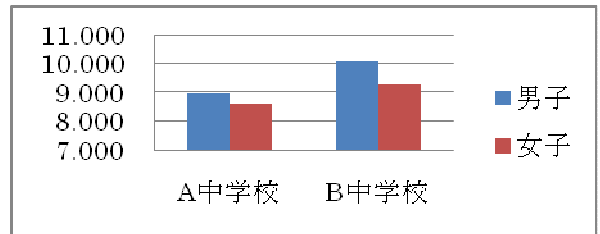


Figure 9: 因子別「先生との関係」(7月)

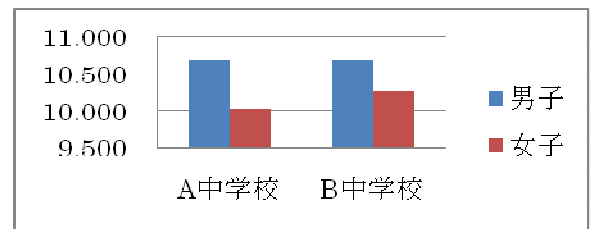


Figure 10: 因子別「学習」(7月)

(4) 学校環境適応感尺と状態不安との関係

ア 適応感の群分け

学校環境適応感と状態不安の関連を見るために、学校環境適応感平均値より 1/4SD 高いグループを高群、1/4SD 低いグループを低群、平均値±1/4SD を中間群とした。中間群を除き高群と低群の2月から7月にかけての推移から、高群から高群を「適応群」、低群から高群を「適応向上群」、高群から低群を「中1ギャップ群」、低群から低群を「不適応群」として4分類した。

イ 4分類と状態不安の各時期について

7月の状態不安(Figure 11)の中学校×適応感4分類の二要因分散分析では、4分類に有意な差があった。「適応群」「適応向上群」は「中1ギャップ群」「不適応群」より有意に高かった。9月(Figure 12)は中学校の主効果があり、A校が不安が高かった。

ウ 4月から9月にかけての推移

推移は(Figure 13, 14)「適応群」と「適応向上群」は全体の推移と同様で、「不適応群」は4月は高いが徐々に低くなった。「中1ギャップ群」のみA校は不安を抱えたままであり、B両校は軽減されていく

という推移を示した。「適応群」と「適応向上群」のように適応能力が高い群に属する生徒であっても不安が高まる時期があることも示される結果となった。

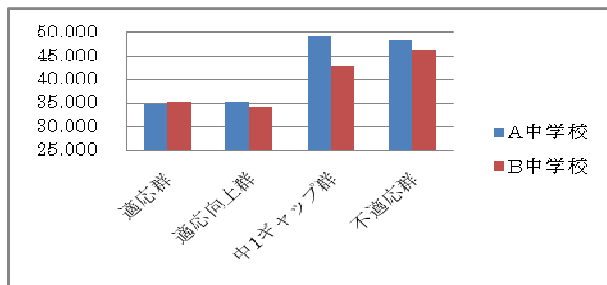


Figure 11: 中学校と4群による7月の状態不安

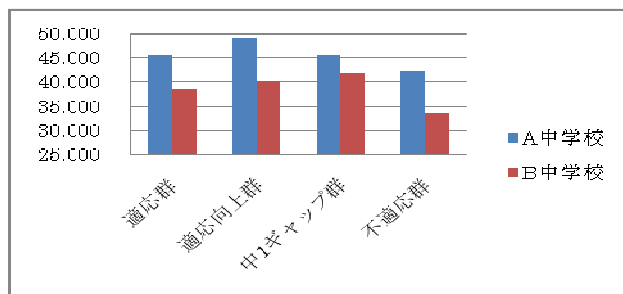


Figure 12: 中学校と4群による9月の状態不安(SD)

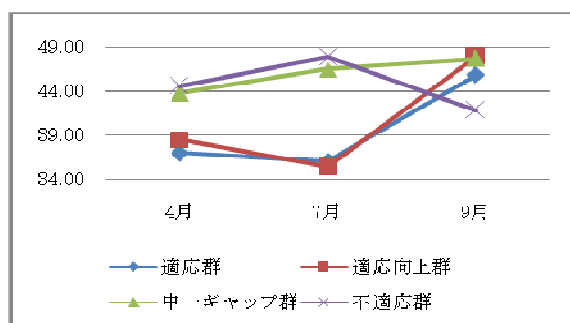


Figure 13: A校における4群の状態不安の推移

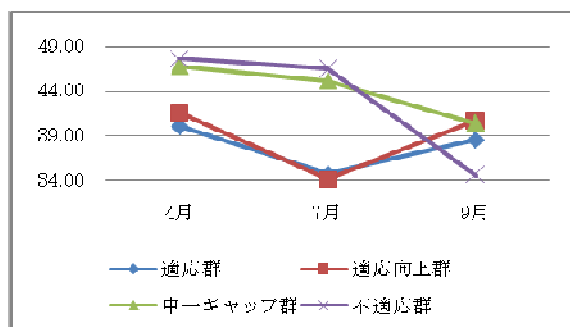


Figure 14: B校における4群の状態不安の推移

IV 総合的考察

A校とB校の違いは人間関係、特に女子に表れるという結果を得た。手だてがあれば不安を減らす効果が期待でき、適応に関しても小学校の状態を維持できることが示唆された。このように初期の手だてには不安を減らす何らかの効果があり、適応感を高めることができると言えよう。

例えば、今回、対象となった研究校のオリエンテーション合宿は、学校生活全般にわたる十分な情報の提供と円滑な人間関係を考慮した活動が内容として盛り込まれており、合宿前後に行われた個人面接や、いじめへの取り組みも効果的であったと思われる。また、藤田・伊藤・坂口(1996)は、今日の多くの小中学生が少人数で固定的な友人グループに所属しており、とりわけ女子のグループが閉鎖化する傾向にあることを報告している。本研究においても不安・期待の調査や適応感の因子ごとの結果から友人関係や学習に手だてが必要であることが示されている。そのために人間関係においては人とのつながりを学ぶスキルを、学習においては計画の立て方、勉強方法などこまやかな指導を1年間の見通しを持って、継続して行うことが必要である。

このように5月から7月にかけては、個々への対応と集団への対応を織り交ぜて手だてをとっていくことが大切であると思われた。夏休みを迎える時期には、不安はおさまる傾向にあるが、ギャップを感じている子は不安を抱えたままである。不適応を示す子どもたちに対しては、9月からの学校生活に不安を持たないように個々への適切な対応が望まれる。

そのために、小中がお互いの学校システムを理解し児童生徒に中学校生活への展望がもてる手だてを共に考える体制を整えていかなくてはならない。その中で教育相談担当者が、生徒の状態を具体的に把握できるチェックリストの活用や小中の交流、中学校生活への適応のための教育的介入のプログラムを年間計画の中に組み込み、中心となって組織を動かしていくことが大切である。

引用・参考文献

- 藤田英典 他 1996 小・中学生の友人関係とアイデンティティに関する研究 東京大学大学院教育学研究科紀要 Vol.36 105-127
- 小泉令三 1994 中学校における情報の取得 福岡大学紀要、43号、4分冊、291-297
- 都筑 学 2001 中学校生活への期待・不安と時間的展望との関連 教育心理学研究 567
- 新潟県教育委員会 中1ギャップ解消に向けて「文書館」

